

現代日本におけるキリスト教教育理論に関する一考察

—「教育の神学」批判—

深谷 潤

はじめに

今日、日本のキリスト教教育の研究者は、キリスト教教育と諸学問との関係を総合的に考察する立場と、神学を中心とした教会教育としてキリスト教教育を研究する立場の大きく二つに分類できる。

前者は、主に日本のプロテスタント系の神学者や牧師・チャブレン、キリスト教学校関係者を会員として1988年に設立された日本キリスト教教育学会においてみる事が出来る。この学会は、キリスト教教育の理論的研究を中心に活動する国内で数少ない学会である。実際、そこでは具体的なある特定の学者の理論が「～のキリスト教教育理論」として普及しているのではなく、様々な神学や教育学、思想が基礎となって「キリスト教教育の理論」と大まかに見なされている。この現象は、ここ10年間の日本キリスト教教育学会の学会誌「キリスト教教育論集」に掲載された論文の傾向から容易に判断できる。1997年までの学会誌に掲載された論文は、思想系、哲学系、神学系、その他社会科学、道德教育、教師教育、教育課程など多岐にわたっている。

一方、後者の立場は、1980年に「牧会伝道と学校におけるキリスト教教育に篤い使命感と情熱をもつ」^{*1}有志によって始められた「学校伝道研究会」

が発行した『教育の神学』にみられる。この本の中には、日本のプロテスタント神学界を代表する研究者や牧師たちのキリスト教教育に対する提言がまとめられている。例えば、大木英夫は、キリスト教教育が教育学の専門家ではなく神学者や牧師が取り組まねばならないことを繰り返し主張している。^{*2}キリスト教教育はキリスト教教育学ではなく、教育の神学において基礎づけられるべきだと言うのである。^{*3}それは、教会をその根本的立場とするため、キリスト教教育は教会を中心としたものとなる。^{*4}また、同じく学校伝道研究会が発行した『キリスト教学校の再建（教育の神学 第二集）』^{*5}では、第一集と比べ若干トーンダウンしたものの、教会による人材育成の重要性を基本とし^{*6}、神学を中心としたキリスト教教育のあり方を相変わらず強調している。

神学を中心としたキリスト教教育は、同時に信仰共同体としての教会を中心とした教育を意味している。キリスト教の歴史において、今橋が指摘するようにキリスト教教育は神学や教育学的検証がなされる以前から教会の中で実践されてきたのである。^{*7}その意味では、大木の批判は、先の日本キリスト教教育学会の多くの研究者に対して向けられているといえる。

本論文の目的は、後者の立場である教育の神学を批判し、新たなキリスト教教育の立場を提示することである。次のような段階を経て論を進めていきたい。まず第一に、教育の神学として現代日本の代表的なキリスト教教育理論を概観する。第二に、教育の神学のもつ方法論を批判し、前者と後者をつなぐ新たな立場を提示する。第三に、その新たな立場がもつ問題点を検証し、

*1 学校伝道研究会編『教育の神学』ヨルダン社 1987年 p.313

*2 Ibid., pp.17-18

*3 Ibid., p.16

*4 Ibid., p.19

*5 学校伝道研究会編『キリスト教学校の再建（教育の神学 第二集）』ヨルダン社 1997年

*6 Ibid., p.105

*7 今橋 朗「キリスト教教育」in: 神田健次ほか編『総説 実践神学』

日本基督教団出版局1993年 p.190

さらにその解決を模索する。

尚、教育の神学は先述のように本来学校伝道研究会の論集のタイトルである。本論では、この研究会の基本的立場である教会および神学を中心としたキリスト教教育を便宜的に「教育の神学」と呼ぶことにする。

1. 現代日本のキリスト教教育理論

教会を中心としたキリスト教教育理論は、先の『教育の神学』の論集に個別に掲載されているが、まとまったものとしては、今橋の「キリスト教共同体教育」や奥田の「キリスト教教育理解の類型」にみることができる。^{*8}

今橋によると、キリスト教教育で重要なことは、共同体の概念である、という。^{*9}彼はキリスト教教育の歴史は信仰共同体の歴史であり、教会の歴史であるという立場をとる。共同体には無意図的教育力という機能が働いているという。^{*10}それは学校教育などのように意図的・組織的に行われる教育とは異なり、「潜在カリキュラム (hidden curriculum)」(ウェスターホフ) などによって展開されるのである。彼はシーモアのキリスト教教育理論の5モデルを紹介するなかで、特に二番目の「信仰共同体の社会同一化 (enculturation)」に無意図的教育力を強調する立場を説明している。具体的にその教育は、聖書物語に触れ、礼拝に参加することによって無意図的に共同体の文化の中に参与していくことであるという。^{*11}ここで重要なのは共同体の質であるとい

^{*8} 山内の著書(山内一郎著『神学とキリスト教教育』日本基督教団出版局 1973年)は、欧米の神学者の教育思想を広範にまとめている点で優れている。また第三部の解釈学的課題の考察も示唆に富んでいるが、日本のキリスト教教育の抱えている問題の認識にたった理論を展開しているとはいえない。吉岡の研究は(吉岡良昌著『キリスト教教育研究』聖恵授産所出版部 1994年)、キリスト教教育の原理や歴史についての幅広い考察が特徴である。この研究もまた実践的考察の上で教会教育と学校教育の問題点を看過している。

^{*9} 今橋 p.191

^{*10} Ibid., p.192

^{*11} Ibid., p.207

う。換言すると、共同体の価値観やライフ・スタイルが教育力の尺度となるのである。

本来シーモアは教育理論として5モデルを提示しているのではなく、キリスト教教育への接近方法を5つに分類・整理したのであるが^{*12}、今橋は理論としてそれらを受け取っている。シーモアは5つのメタファー（教育、信仰共同体、人間、正義、意味）を用いて教育目標やカリキュラム・問題点などを表にして整理している。^{*13}今橋の理論も、後述する奥田の類型も次のようなシーモアの分類・整理が基礎となっている。

（1）宗教教授（religious instruction）

目標：宗教としてのキリスト教の伝達

カリキュラム：キリスト教について学習者が知識を獲得しうるように教師が学習環境を整える

問題点：高度の専門性の期待、組織化された教育の場と学習内容の過度の強調

（2）信仰共同体（community）

目標：人々が信仰と出会い、信仰に基づくライフスタイルを学習する共同体としての教会の形成

カリキュラム：教師（祭司）が教会の中で信仰を求めていきるよう配慮、信仰告白の準備教育

問題点：意図的な共同体化の困難さ、教会の基盤である信仰の確かさ

（3）霊的、精神的発達（development）

目標：信仰による霊的・精神的成熟

カリキュラム：リーダーが人生の危機的状況において信仰の成長を

^{*12} ジャック・L・シーモア編『キリスト教教育の現代的展開』（奥田和弘・西垣二一訳）

新教出版社 1987年 p.19

^{*13} Ibid., p.19, pp.42-43

配慮

問題点：発達段階の評価、個人の過度の強調

(4) 解放 (liberation)

目標：教会と人々との解放と人間化を求めている変革

カリキュラム：権力構造の認識、新しい社会の在り方、変革のための対話

問題点：教会での権力・変革の取扱いの困難さ

(5) 解釈 (interpretation)

目標：キリスト教的展望と実践の現代における諸経験との関連づけ

カリキュラム：経験の意味を信仰によるストーリーの関連で理解するよう案内

問題点：経験を神学的に反省する困難さ

* (教師・学習者・内容・貢献の項目は割愛、学習の場は後述)

奥田の場合もまたシーモアの類型に基づきキリスト教教育の5つのアプローチを示している。①教授中心のアプローチ②発達中心のアプローチ③解釈中心のアプローチ④活動中心のアプローチ⑤共同体中心のアプローチ^{*14} これらのアプローチは、教会が教育をどのように理解するか、という教会教育の方法論として類型化されている。^{*15} (④の活動中心のアプローチはシーモアの(4)解放に該当する)

今橋と奥田の理論を見る限り、キリスト教教育理論は教会教育の理論として位置づけられているといえる。しかし、彼らの理論の元となるシーモアの考えによれば、キリスト教教育の場を教会中心に捉えているものは、第二の分類の信仰共同体だけであり、他の四つの分類では、以下のように学習者の生活・生涯全般に渡っているのである。^{*16}

^{*14} 奥田和弘著『キリスト教教育を考える』日本基督教団出版局 1990年 pp.58-59

^{*15} Ibid.

学習の場 (1) 宗教教授：組織化された教育の場

(2) 信仰共同体：信仰共同体 (*実際の教会を意味する)

(3) 霊的、精神的発達：人間の全生涯

(4) 解放：キリスト者が世界に関わる場所

(5) 解釈：人間の生活全体

このようなシーモアの見解と今橋・奥田による解釈の相違は、共同体とキリスト教教育の関係の相違からくるものである。今橋・奥田両者においてキリスト教教育は、共同体の中における教育である。しかし、必ずしも共同体の中に限定されないという。^{*17}今橋はキリスト教教育の二つの方向性を「教会へと求心的に焦点を絞る方向性」と「この世の全領域へと遠心的に派遣されていく方向性」と表現している。^{*18}また、奥田は「キリスト教信仰が (...) 広く社会、世界に対する展望をもつことにより、キリスト教教育もそれらを共有する」^{*19}と述べている。これは今橋の後者の方向性と類似している。一方、シーモアは、今橋や奥田のように共同体の内と外という枠組みでキリスト教教育を考えるのではなく、学習の場をみる限り、人間の生活の場、生涯すべてにキリスト教教育に関わり、共同体もその一部と考えている。

2. 批判的考察

先の節で明かになったように、現代日本のキリスト教教育理論はシーモアのキリスト教教育の分類に基づき、教会教育としての特色をもっている。こ

*16 シーモア、pp.42-43

*17 今橋 p.209、奥田 p.243

*18 今橋 p.209

*19 奥田 p.243

れに対して次のような批判ができるであろう。

日本の基督教教育理論は、共同体の内側中心の理論であり、また内側から外側へのアプローチに偏っている。

この批判の根拠として、以下の三点が考えられる。

- ①教会教育として基督教教育が位置づけられていることにより、学習の場が教会内に偏る傾向があること。
- ②基督教教育が信仰をもつ者からもたない者への教育になりがちであること。
- ③共同体の共通言語のもつ壁の存在に信仰をもつ者が無関心であること。

第一点は、すでにこれまでの議論で説明済みである。基督教教育イコール教会教育の立場は仮に基督教学校での基督教教育の場合であっても、教会とのつながりの中で捉えられている。例えば、多くの基督教学校で宿題として教会の礼拝を義務づけ、又教会との協力体制をとっている。

第二点は、基督教教育が実践神学の一部であり、宣教を目的としてきた歴史的背景があることに由来する。その結果、信仰をもたないものが基督教教育をすることは、不可能である、という前提が自明のように考えられている。多くの基督教関係の書物は、基本的には信仰に導くための教育を説き、信者からそうでない者へのアプローチである。しかし、基督教教育の現場は必ずしもそうなっていない。実際に基督教学校のチャペルの時間の講話は、ノン・クリスチ안의教員も行う場合があり、また幼稚園や保育園でも多くのノン・クリスチ안의教員や保母が礼拝や基督教の行事を行っているのである。教育の神学では、多くのノン・クリスチアンによって基督教教育が現実には担われていることに対し、理論的枠組みを与えることができていないと言える。

第三点は、第二点から派生する問題である。信仰の有無の観点からすれば、教育の神学はもつものからもたざるものへの教育である。例えば、「救われている」、「救われていない」という救済に関わる用語は神学上重要なものであるが、しばしば信仰の有無の区別以上に、差別的感情を生み出すきっかけにもなりうる。確かに、教会の専門用語はキリスト教の入門書や個別のガイドンスで表面上習得可能である。しかし、教会のもつ文化的価値観を共有していくこと（enculturation）は、今橋の指摘するように共同体の無意図的教育力に依存している。教育の成果を潜在カリキュラムや聖霊の働きに依存することは誤りではなく、むしろ神学的根拠のあることであろう。しかし、その根拠はあくまで教育の神学からの立場であり、ノン・クリスチャンの立場を十分に包括しているとはいえない。

仮に教育が教師と学習者の相互的な経験に基づいてなされるというデューイの視点に立つならば、現代の日本のキリスト教教育理論は原理の上で神中心であることは動かし難いが、方法論上、いまだに教師中心主義の教育理論しかもち得ていないと言えよう。キリスト教教育が神学の原理に基づきつつ、教育学として考察可能になるためには、学習者中心のキリスト教教育理論がさらに探求されるべきである。

次節において、学習者中心の理論を方法論の上で考察していきたい。換言すると、共同体の外側から内側へのアプローチは可能か、という問題に取り組んでいくことにする。

3. 新たなアプローチの可能性と問題点

キリスト教教育理論において外側から内側へのアプローチは可能か、という疑問に対し、私は可能である、という立場からシーモアのキリスト教教育理論のメリットを活かしつつ、修正を加えた次の三つの方法論的モデルを提示したい。

モデル1：教養としてのキリスト教の教育

モデル2：個人の内的覚醒によるキリスト教教育

モデル3：倫理的共通課題（環境・生命倫理・人権など）を起点としたキリスト教教育

まず、モデル1は、学校（公立学校含む）の授業やテレビやラジオなどのメディアを通してキリスト教を知識として教授するアプローチである。現在すでに放送大学やカルチャースクールなどでも行われているものである。このモデルのメリットは、宗教に対する無知が及ぼす漠然とした不安や偏見から人々を解放し、ある程度の距離をもって宗教と接する機会を提供できることである。デメリットは、キリスト教の知識は増えても、信じることに直接つながりにくい点である。換言すると、シーモアの類型1（宗教教授）で同様に指摘していることだが、このモデル1においても神学と人間科学の関係の検討が不十分になりがちになることである。

モデル2は、個人の個別の宗教体験によって神と自分との関係に気づき、信仰に導かれるアプローチである。自然の摂理への感動や固有の神秘的体験、読書による深い思索などを通して自己を超越した存在者を感じ得し、知識の集積では捉えられない神と出会うのである。このモデルのメリットは、神と人との関係が個人の内面の深層で成立することにより、直接自分が神と向き合っている実感をもつことができる点である。一方デメリットは、シーモアの第3、5類型で指摘されているように、このモデルは個人主義に還元され、共同体へ至りにくいと考えられる点である。

モデル3は、神の啓示を前提とする教育の神学のアプローチと正反対に、人間の倫理的課題を克服する問題解決型の方法論である。人類共通の課題を立場を越えて考えつつ、人間観・神観の相違を明らかにしながら、キリスト教の独自性を確認するものである。メリットとして、人類の共通の課題に取り組むことによって宗教や立場を越えた対話が可能となることである。デメリットとして、キリスト教教育の方法論として捉えたときに、倫理的課題に

においてキリスト教の独自性を主張できる局面がどこにあるかという問いに答えねばならない点である。

これら三つのアプローチは、個々に独立しているのではなく、実際に相互に関連し合いながら複雑なアプローチを形成している。次に、これらのモデルの問題点を解決するために必要なことは何かを考えていきたい。

4. 外と内の媒介者

先に示した新たなモデルには、それぞれ次のようなデメリットがあった。

- ①神学と人間科学の関係の検討が不十分。②個人主義に還元されやすい。
- ③キリスト教の独自性が希薄。

これらのデメリットは、外にいる学習者を内に関連づける人格の存在（他者）によって解決可能であると考ええる。この人格とは、一人の信仰をもった人間であり、共同体への案内者である。ただし、その人物は、単なる教会への勧誘者ではない。むしろ、場合によっては武田清子の『土着と背教』の「背教型」*20に属するような、現実の教会と距離を保ちながらキリスト教信仰をもっている人間もありうる。この人格において、さきの問題点は次のように解決される。

まず第一に、神学と人間科学の関係は、理論として統合されるのではなく、例えば、信仰をもった科学者のようにその人物の生き方、生きざまによって示される。知識の累積が自己を相対化し、真理に対する謙虚さを育むのである。仮にこの人物が諸学問の専門家であるならば、学習者は、教会の外で彼・彼女の学問や知識に触れ、人格的關係において信仰に導かれる可能性がある。

第二の問題に関して、個人の宗教的体験が、他の人格を通じて行われるならば、個人主義に還元されたままに留まることはない。何故なら、自分以外

*20 武田清子著『土着と背教』新教出版社 1967年 p.14

の人格に出会うことにより少なくとも二者の関係が成立するからである。もし、既存の教会に導かれなくとも、学習者はその人格を通してキリストとの関係をもつことができる。

第三の問題に関して、キリスト教の独自性が比較宗教的検討の上でキリスト教の優劣の問題につながらないように注意しなければならない。キリスト教信仰をもつ人格との出会いが偶然的であり、その人格を通して学んだことが自分にとって必然的に重要であると経験することが大切なのである。つまり、なぜ他宗教や思想ではなく、キリスト教であるのか、という問いは、客観的に返答できるものではなく、極めて主観的で実存的に答えられるべきものである。

おわりに

本論文で新たに提示された共同体の外から内へのアプローチは、共同体がその構成員の中で凝り固まってしまったり、外の社会との関係を断ち、セクト化することを防ぎ、常に外へ目を向けるためにも有効であると考えられる。とくにモデル1や3は、多様な立場の人々との対話の機会を増やす可能性を秘めている。またその対話を通して、従来の内から外へのアプローチにも貢献可能である。今後、実践的考察の上でさらに重要になってくるテーマは、共同体そのものの捉え方である。端的には、共同体を既存の教会と狭く捉えるのではなく、キリストの啓示を共有し、キリスト教の様々な象徴を通して連関するゆるやかなネットワークとして広く捉えることが必要であろう。神学的には聖霊論を軸とした新たな教会論の構築が望まれる。

本論文の結論として、教会の内と外の両方を媒介する者の必要性が説かれた。媒介者とは特別な能力を兼ね備えた人格者ではなく、むしろキリスト教教育に関わるものすべてが潜在的媒介者であり、新たなキリスト教教育理論の実践者となりうることを最後に強調しておきたい。

A Study of a Theory of Christian Education in Japan Today

—A Critique on “Theology of Education”—

Jun FUKAYA

A representative theory of Christian education in Japan is characterized as a church-centered education. From this standpoint, Christian education should not be a part of general education, but it should be based on Christian theology. This Christian education is called “Theology of Education.”

A critique of the “Theology of Education” is that it focuses on inside the church, then it tends to become imbalance outside and inside. According to Imahashi saying, Christian education should be an education for Christian communities. Okuda partly suggests that Christian education in church is able to influence outside the church. But he also thinks that the base of Christian education should be inside the church, not outside.

Such church-centered Christian education might lead to two problems. One is a lack of interpersonal dynamics; the education is not mutual communication, but one-way preaching from a Christian to a Non-Christian. The other is making an invisible wall; Christian do not notice the language barrier between Christians and Non-Christians. To solve these problems, new approaches of Christian education should be proposed. Jack L. Seymour, who greatly influences the theories of Imahashi and Okuda, does not focus on a church-centered education. But I suppose that Japanese scholars interpreted his classification of Christian education as a church-centered education. Therefore, I find his statement should be interpreted more originally. According to Seymour's five approaches of Christian education,

type two (community) is classified church-centered education, but type one (religious instruction) and type three (development) are not limited to church-centered education. [*type four (liberation), type five (interpretation)]

New approaches of Christian education are as follows;

- 1 . Knowledge of Christianity as a general educational program could be offer in normal schools.
- 2 . Religious consciousness could be developed through private experience, facing unusual situations.
- 3 . Having discussions on ethical themes could help prepare the path of Christianity.

All of these three approaches are basically outside church education. However, someone whose standpoint is mainly church-centered education would be critical all three ways. For example, in the first approach, collecting knowledge about Christianity is not same as Christian faith. As for the second approach, one might say that personal access to a Christian community is not easy. The third approach may be criticized in that the truth of Christian revelation of Jesus Christ is not necessary in answers to ethical problems.

In a person, who is of Christian faith and is respected in other social fields - such as an academic or a vocational world - both the church-centered education and the new approaches are integrated. Thus, such an individual could overcome some of the difficulties in question, e.g., by making small groups with Non-Christians and by developing a network instead of a rigid Christian denomination. Additionally, Non-Christians could deepen their lives in Christianity, by sharing experiences within the network, even though they dare not to commit themselves to Christianity rather than to other religions. In such a way even without commitment they might still feel Christian revelation in interpersonal dynamics.